

DPRI NEWSLETTER

112
2026.5

特集
02

座談会 防災学の未来



座談会出席者

渦岡 良介 所長／地盤災害研究部門 教授
松田 曜子 巨大災害研究センター 准教授
倉田 真宏 地震防災研究部門 准教授
小暮 哲也 地盤災害研究部門 教授
伊藤 耕介 気候変動適応研究センター 准教授
[司会]
上田 恭平 地盤災害研究部門 准教授

06

防災研の新章スタート! 渦岡所長に聞く

連載

- 07 若手研究者から ②④ 中山 雅之
斜面を伝わる波で探る地すべり発生の仕組み
- 08 研究室紹介 ⑤ 宇治川オープンラボラトリー
- 09 新スタッフ紹介
- 10 イベントレポート
- 11 DPRI 掲示板 受賞・表彰・就任／人事異動
- 12 新刊紹介
編集後記



京都大学防災研究所

Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University



渦岡 良介
 所長/地盤災害研究部門 教授
 地盤工学

倉田 真宏
 地震防災研究部門 准教授
 建築耐震工学

小暮 哲也
 地盤災害研究部門 教授
 応用地質・地形学

伊藤 耕介
 気候変動適応研究センター 准教授
 極端大気現象

松田 曜子
 巨大災害研究センター 准教授
 災害リスクコミュニケーション

司会 上田 恭平
 地盤災害研究部門 准教授/
 広報・出版専門委員会

特集 座談会 防災学の未来

近年、激甚化する自然災害や複雑化する社会情勢を背景に、防災学が果たすべき役割はますます重要になっています。そこで、渦岡良介所長と、各分野を牽引する4名の若手研究者とが集まり、最新の研究動向から、AIやビッグデータの活用、国際協力、さらには研究環境の改善案まで議論を交わしました。当研究所が提唱する「未災」の概念を軸に、学理と社会との接点を追求する防災学の現在地と、次世代へ向けて未来の展望を語ります。

「防災研はさまざまな技術と社会の接点を追求する場」

渦岡 私は地盤工学を専門としています。1995年の阪神・淡路大震災がこの道に進むきっかけになりました。液状化を予測したい、という思いをスタートに、以来、研究を続けています。他の

分野では、最近の研究の動向はいかがですか。

倉田 建築は、防災のなかでも一般の方々身近な領域ですが、20~30年では、研究が目指すところは良くも悪くも変わらないと言えます。建築基準法を満たすという縛りがあるためです。その中でも、基準以上を満たすものを作ろう、とさまざまな研究が進められています。研究には、ある一方にしばらく進めばもう一方への揺り戻しが来るというサイクルがあり、上昇スパイラル状に進んでいると言えますね。

安全側に倒して想定していくことが重要ですから、おのずと変えてはいけない部分がありますよね。最近、AIを導入して予測精度がアップしたとも言われており、時代が変わったのを感じます。ただ、怪しみながら付き合うことは必要。そして、今後数十年でさらに極端降雨が増えていく可能性が高いので、温暖化についての研究は引き続き重要です。法制度や対応体制などについても、どのように気候が変容するかを今から考えて動く必要があります。

松田 防災研はさまざまな技術と社会の接点を追求する場だととらえていますが、最終的に防災をするのは人です。私が所属する総合防災研究グループは阪神・淡路大震災をきっかけに設立され、人や社会についての研究を続けてきています。一方で、災害やリスクそのものは複雑化して非常に難しくなってい

伊藤 防災研究では



ます。コロナ禍や戦乱など、多様な現象がおき、世界規模で人や情報の行き来も増加しています。それをどう優先順位で引き受けていくのか。急速に進展するAIも、役立つ一方で、それ自身がリスクであるとも考えられます。

「データベースの充実を業績として評価につなげられないか」

小暮 岩盤の力学についての教科書は、実は1990年代から大きく変わっていません。根本の現象について次のパラダイムシフトがあるとすれば、ごく微小な挙動を観察できる技術ができたときかと思います。もちろん技術革新は日進月歩で進んでおり、地すべりの分布を衛星画像などで確認することは飛躍的に可能になりました。また地すべり地形分布図も整備され、情報共有は格段に進みました。今後は、国や世界レベルで地盤の情報を集約する仕組みができ、世界中の研究者が同じデータを見ながら議論することができるようなになればと思います。また、データベースの充実が業績として評価につながるようなればいいですね。

倉田 建築の分野でも、阪神・淡路大震災以来、災害・実験のデータが蓄積・共有されてきています。研究室内に囲い込まれていたデータをオープンにしていく気運が高まっており、とくに海外では誰が先にデータベースを構築するかで競争になっているほどです。日本建築学会でもデータ自体を主たる内容とするデータ論文にdoiを付して共有する取り組みを始めています。現在は、科研費ではデータ公開は奨励されていますが義務ではありません。いっぽう、海外ではデータ公開が義務付けられていることがほとんどです。

伊藤 気象の分野では、最近ではデータ共有を含めて大学と気象庁との連携が深まっています。データを公開すると、それを利用してくれた新しい分野との接触が始まります。台風の目についての航空機観測を行った際には、貴重な観測なのでデータについて海外からも問い

合わせがありました。データをオープンにすることで他の分野でも新しい発展がはじまると思います。

松田 社会科学のアプローチも用いている私の分野では、ソーシャルメディアや位置情報などのビッグデータからも人に関するデータを集めることができます。

最近では、そういった研究も増えていきます。一方、人に直接アンケート調査を行うことは倫理上の制約やプライバシー意識の高まりなどから難しくなりつつあります。さらにオンラインの調査では、AIの台頭で本当に人が回答しているかどうかとも判別しづらくなってきています。というわけで、既存のデータから見つけられるものは見つけ、それでも見つけられないことを直接調べるという方向に回帰してきていると思います。

渦岡 防災研の年報にもデータの掲載を奨励する何らかのインセンティブを設けるといいかもしれませんね。学術雑誌の中にはデータを公開すると掲載料を安くするしくみを検討しているところもあります。

伊藤 ソーシャルメディアから入手できるデータは若者のものを中心にありますが、防災というテーマでは年配の方の声も積極的に取り込みたいですね。そういえば、最近、ソーシャルメディアのXでは、他言語での投稿が自動的に日本語に翻訳されて表示されるようになりました。互いに情報を得るのが簡単になりそうです。もちろん良い面と悪い面があるでしょうが、研究者にとってはデータが見つかりやすくなったり、共同研究の範囲も広がるのではないかと思います。

「小学生でも「震度」という言葉を知っている日本」

小暮 防災研が持っている大型実験装



置には、海外からの共同研究の申し込みが多々あります。ただ、これらの装置の維持・管理にはお金や時間がかかり、今後も求心力を保つためにどう新しいものに更新していくかが問題になっています。

倉田 耐震工学分野では、国外でも優れた実験施設が登場しています。中国では規模の大きい装置が続々と登場し、水中構造物の挙動を実験できる特殊な振動台もあります。

渦岡 一方で、日本の装置には、自由に安く使えるというメリットがあります。ただ、最先端ではなくなってきつつある。

松田 防災研はいろいろな分野の研究者と気負わずに意見交換ができるというのがメリットだと言われます。とは言うものの、海外の研究所は予算の桁が違っても感じました。我々だけでは解決できない問題ですが。

伊藤 防災研の宇治川オープンラボラトリーにある「鉄塔」での観測で、他に例のないほど長期にわたる気候変動の貴重なデータが取れています。日本の気象についてはこれからも日本の力で観測を続けていくのはもちろんのこと、一部の航空観測などについてはアメリカや東アジア諸国との国際協力で進めようという話をしています。

松田 小学生でも「震度」という言葉を知っているのは日本くらいなのだそうです。また、日本ではスマホで気象や河川の情報を簡単に受け取ることができます。情報を出すにあたっての適切な



最大瞬間風速81メートルの猛烈な台風に襲われたにもかかわらず死者ゼロだったということがありました。地域の方々が情報を的確に集約してきちんと避難したことが効いたと思うのですが、あまり知られていません。多くの家屋が倒壊しましたが、人的被害がほとんど

ではないでしょうか。防災研からも専門知識を出し合ってそういった法整備に関われたらと思います。

伊藤 沖縄にいたときに一般の方から「最近、強い台風がこないね」と言われました。データをみると全くそんなことはないのですが、人々の意識としては被害が大きくないためそうなるのだと思います。家の作りが良くなった、氾濫対策が進んだといった理由が考えられますけど、防災ってほんとうに難しいですね。少し別の話ですが、ある島にお住まいの高齢者の方に役場の方がいくら呼びかけても避難してくれなかったのですが、同じ町内の若者が頼んだら受け入れてくれたということがあったそうです。防災にとってはサイエンスも大事ですが、人のつながりにも力があるのだなと思います。

「研究者になりたい」と学生に思ってもらえる大学改革であってほしい

渦岡 さて、京大では現役研究者が研究・教育活動に専念できるように、これから新たにデパートメントオフィスというものを作ろうとしています。現在は、所長・副所長や各委員会として研究者が担当しているアドミニストレーション業務の部分はこのデパートメントオフィスで担当し、研究者にかかる研究・教育以外の業務負担をできるだけ減らしていきたいと考えています。研究支援についてどのようなことを期待されますでしょうか。

フォーマットやチャンネル、といったことも含めてこういった防災文化を他の国にもどう広げていくかを考えたい。

伊藤 2013年の台風ハイエンによって高潮が起きましたが、「高潮」というものがどういうものなのかを人々がよく理解していなかったために海に様子を見に行く人がいて被害が大きくなったと言われています。日本人も東日本大震災までは津波というものをよくわかっていなかった人が多いと思います。このように、まれにしか起きない災害についての想像力を高めてもらうことも防災研の使命ではないでしょうか。

渦岡 まさに防災研が提唱する「未災」ですね。潜在的に起こり得る災害について想像力を高め、必要な対応を準備しておきたいものです。

「防災における「成功体験」を評価するのは難しい」

倉田 災害の規模のとらえかたについて。能登半島地震は断層が100km以上ずれ動いた大規模地震で、経済・アクセス・復旧などにおいても対応は困難を極めました。しかし、直接死が約200名のため、7~8万人が亡くなったシリア・トルコ地震が大きく扱われるのに比べて、海外ではそれほど認識されていません。これまでの備えを抜きに災害の規模を死者数でとらえることの弊害ですし、伝え方が難しい。

伊藤 防災における「成功体験」は伝わりにくいです。2015年に与那国島が

なかったことで、報道が少なかったことは一因でしょうね。しかし、このように被害をうまく防げた例についても知ってもらいたいですね。

渦岡 地盤で言えば、建物に被害があったときは近くの被害がなかった建物と比較します。まさに失敗例と成功例ということになります。

松田 「反事実 (counterfactual)」と言って、この対策がなければこうなっていた、と「起こらなかった未来」を考えるという研究もあります。この対策があったからこのくらいの被害で済んだ、ということ調べて、社会にその価値を伝えることも必要であると思います。

渦岡 たとえば国交省では、ダムや堤防について「これがあったから防げた」というアピールに力を入れていますね。実物があると伝えやすい。

小暮 土砂災害については、1999年に発生した広島県の土砂災害の教訓からイエローゾーン（土砂災害警戒区域）、レッドゾーン（土砂災害特別警戒区域）と、危険度とエリアをわかりやすく指定し、建築物に規制を設けるようになりました。その効果はあるはずですが。土砂に限らず様々な災害について法律を整備すれば同様なことが可能



松田 同じ京大の中でも、子育て中の研究者をサポートする制度について吉田キャンパスと宇治キャンパスとで格差があります。病児保育やお迎えサービスなど、全学を対象としているものの、宇治では実質上使えないものもあります。制度を整えば、男女を問わず、そして海外からの研究者からもよりキャンパスの魅力を感じてもらえると思います。

伊藤 小さい子どもや病気の家族がいる場合には、在宅勤務の制度も拡張してもらえるとよいかもかもしれません。現在は週2日までという限定がありますが、それでは対応が難しいこともあるかと思っています。あるいは、前任の大学では「この週のうち2日間、計12時間勤務」といった雇用契約が可能でした。人手不足は深刻ですので、多くの方に働いてもらえる仕組みがあるとよいかと思っています。

小暮 子供がインフルエンザ等になれば、5日間は出席停止なので週2日はすぐに使ってしまいますよね。

倉田 私は昨年度サバティカル休暇を取ったのですが、学生の指導に関しては、他の人と分担するのはなかなか難しいなと感じました。長期で不在になると研究室の運営について事前の準備が大変です。指導教員の他にも一緒に学

生を指導する副担当者を決めておくのはどうでしょうか。

小暮 理学研究科には、学生指導の副指導教員の制度があります。

松田 その仕組みは産休・育休を取る際にも必要になります。そういう制度があればドクターの学生や若い研究者にも安心して京大に来てもらえます。

伊藤 従来の教授・准教授・助教で構成される研究室をやめて、研究者がそれぞれPIとして独立して研究を行うしくみに移行するなら、PI同士の横のつながりを作ることも大事になってきますよね。

倉田 施設や研究室の備品管理についても、研究者以外に担当する職種の人を作れないでしょうか。海外の大学ではPC担当のヘルプデスクがあって、その職員に依頼すると、新しく着任した研究者や学生に対してPCのセットアップまでをやってくれました。

松田 大学の改革の方向が、「研究者になりたい」と学生に思ってもらえるようなものであってほしいです。若い世代の人たちにそっぽを向かれないように。



倉田 うまく新陳代謝してデフレマインドを払拭する一手にしたいですね。国際コミュニティの中でポジションを上げて、優秀な人が国内はもちろん海外からも集まって来るような環境にしたい。みなでもっと上を目指そうというマインドでやっていけたらと思いますし、そういった取り組みが評価される仕組みになればいいなと思います。

渦岡 そうですね、教育・研究の場を賢く改革して研究力を高めつつ、これから防災庁が設置されますから、そういった場でも防災研の知見を活かして研究を社会へつなげていけたらと思います。災害が減って、「防災研はもういらぬ」なんて言われる、そんな日が来るのが私たちの最終的なゴールですね。



防災研の新章スタート！ 渦岡所長に聞く



さまざまな質問から、4月から所長に就任した渦岡良介教授の考えと人柄、そして今後の防災研が向かう航路をひも解いてみましょう。

人材の採用に努めます。

海外との交流についてどう思いますか？

国際会議、研究委員会、招待講演などの交流が中心です。外国人は褒め上手ですが、やはり褒められるとうれしいので、私も見習いたいと思います。個人的にはスタンフォード大学での短期滞在が、大学環境の違いに触れることができる機会となった良い経験でした。

座右の銘は？

「寛容」でありたいと思います。何事もバランスだと考え、良いことも悪いことも受け止めるように心がけています。

空き時間の活動・趣味は？

温泉旅行が好きですが最近は何も行けていません。予定がない休日は、午前中はMLB、午後は掃除や買い物、論文査読、夕方は料理番組や旅番組、料理で乾杯、という感じです。

好きな食べ物、おすすめのレストランやメニューは？

小さいころから豆腐とフライドポテトが好きです。よく行くのは銀座ライオンと鳥せい本店です。

プライベートではどんな人？ 自己評価は？

小心者です。買い物の失敗など些細なことでもよく後悔しています。

ヒーローは誰？

デューク東郷と大谷翔平さんです。

子供の頃の夢は？

図画工作が好きだったので、何かものづくりがしたいと考えていました。

防災研の教職員学生へ向けて、最後にひとこと

委員会やイベントなど様々な場を利用して、お互いの研究・教育の話や雑談をしてください。ご要望や改善のためのアドバイスなどがありましたら、いつでも遠慮なく連絡ください。

所長としてまず着手したいことは？

研究者がより多くの時間を自由な研究にあてることが重要です。このため、国際卓越研究大学の研究等体制強化計画の一環として予定されているデパートメント制の導入に向けて具体的な検討を進めたいと思います。関連して、所内の各種委員会や会議の効率的な運営のための改善策を検討したいと思います。

防災研の「良いところ、好きなところ」は？

理学・工学・情報学・社会学など様々なディシプリンの研究者が協働できるところです。また、風通しが良いところも好きですが、さらに良くなるようにしたいと思います。

いままでの防災研のあり方の中で特に「ここを変えたい」というものは？

防災研の風通しの良さを生かして、学生間の交流をもっと活発にしたいと思います。

他の研究機関の制度などで「これは良い」と思った事例は？

これまでの所属機関では研究者の皆さんがもっとフラットでした。

女性・外国人・LGBTなどマイノリティが意思決定に参加するための施策は？

まずは現在の極端な偏りを解消していくことかと思しますので、今後も多様な

研究者になったきっかけは？

民間企業に勤めていたときに発生した1995年兵庫県南部地震です。埋立地で発生した建造物の液状化被害を目のあたりにして、なんとか定量的に予測したいと考え、液状化解析の研究に取り組みました。

研究・教育活動の中で、最も感動したことは？

最近だと、研究室で還暦祝いをしてもらったことです。還暦祝いの幹事を務めた学生が「先生の還暦のタイミングで研究室に在籍できてよかった」と言ってくれたときはうれしかったです。また、学生の結婚式ではいつも感動して涙をこらえています。研究面では、数値解と理論解が完全に一致したとき、数値解が実験データの傾向を再現できたときに感動します。

教育者として大事だと思っていることは？

学生の興味や意思を尊重することです。

これまで指導した学生について心に残ることは？

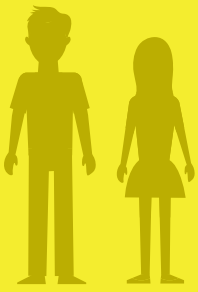
修士論文で、微分方程式の定式化からプログラミングまで自力で取り組む学生には感心します。最近は計測手法や解析手法が日々進化しているので、自ら新しい手法に挑戦している学生をみるとうれしく思います。

渦岡所長については、
防災研 HP「所長就任にあたって」
(QRコード)もご覧ください



若手研究者から ②④

防災研の将来を担う、准教授・助教・研究員・博士課程学生ら
若手研究者による研究を紹介します。



中山 雅之

NAKAYAMA Masayuki

斜面未災学研究センター
斜面モニタリング研究領域
助教

斜面を伝わる波で探る地すべり発生仕組み

地すべりとは

私は、徳島県三好市にある徳島地すべり観測所を拠点に、斜面災害が発生する仕組み（メカニズム）の解明や、斜面を監視する手法の開発に取り組んでいます。四国地域をはじめ、全国各地の斜面を対象に観測を実施しています。地すべりとは、「すべり面」と呼ばれる周囲より強度が低い面を境にして、その上の土砂が動く現象です。地すべりは、もともと発生しやすい地形や地質の特徴（素因）がある場所で、大雨や融雪による地下水の変化や、地震による揺れなどをきっかけ（誘因）に発生すると考えられています。地下水の変化や地震の影響で斜面の内部がどのように変化し崩壊に至るのか、そのプロセスを明らかにすることで、発生予測や早期の警戒に役立てたいと考えています。

斜面を伝わる波の連続観測による内部状態の把握

主に、雨によって地表から数メートルの深さで発生する地すべりを対象とした研究を行っています。この研究では、専用の装置で一定の微弱な振動を斜面に与え、設置した受振器でその揺れを連続的に記録します（図1）。得られたデータを解析することで、雨による地下水の増加や土壌の緩みに伴う、波の強さや伝わる速さの変化が捉えられると期待しています。実際に斜面で観測した「波の位相（波の山や谷）」の変化と、降雨量の時間的変化を比較した結果が図2です。計測開始からおおよそ120～140時間後において、降雨によるノイズの影響で位相の値がばらつくものの、降雨の前後で値が明瞭に変化していることが確認されました。これは、雨によって斜面内部の状態が変化したことを示唆しています。今後は、雨の中でも安定して計測できる手法を確立するとともに、斜面内の水の動きや変形の度合いと、波の変化との関係を詳しく調査する予定です。

地震による斜面の応答

地震によって地すべり被害が発生する事例が報告されています。例えば、2024年1月に発生した能登半島地震では、震源に近い北陸3県（石川県・新潟県・富山県）で400件以上の地すべり被害が発生しました（出典：国土交通省HP「令和6年の土砂災害」）。地震時の斜面の揺れ方や、その後の斜面の変形プロセスなどを調べるために、地震計や傾斜計などを用いた観測を行っています（図3）。観測された波形を解析した結果、斜面の尾根に直交する方向に揺れやすい傾向があることが確認されました。今後も観測を継続し、地震に伴う斜面の動きを明らかにしたいと考えています。

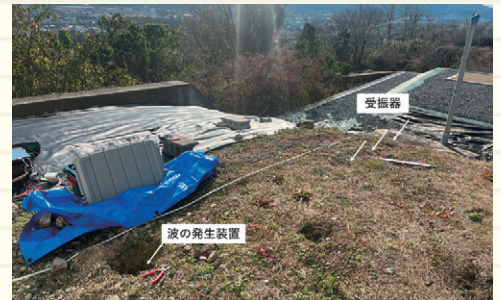


図1 観測所の敷地内での波の連続観測システム設置準備の様子

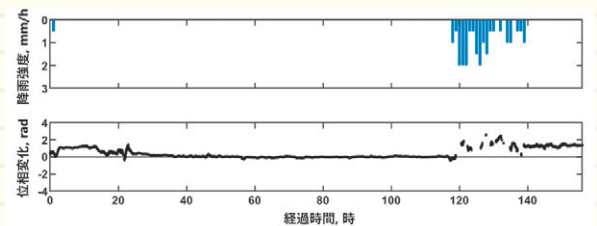


図2 斜面で観測された波の位相変化と降雨量の時刻歴。波の位相変化については、信号強度が一定値以上のデータのみをプロットしている。計測開始から30時間程度までの変動については、計測開始前の降雨の影響によるものと考えられる



図3 (a) 2024年1月に発生した能登半島地震で地すべり被害が発生した斜面と(b)その頂上に設置した観測機器。観測機器は風雨を避けるためコンテナ内に格納されている

研究室の実態と学生の本音を深掘り! /

研究室紹介

学生が学生に聞いてみた

今回の研究室と執筆者

宇治川オープンラボラトリー

気象・流域災害研究部門 流砂・砂防研究分野 (中谷研)
 気象・流域災害研究部門 水災先端計測研究分野 (山上研)
 気候変動適応研究センター 河川防災システム研究領域 (川池研)

インタビュー：K (中谷研D2)

Q1. どんな研究室ですか？

川池研Mさん (D2) 留学生を含めて仲良く、活発でありながら温かい雰囲気だと思います。ゼミだけでなく、BBQや飲み会など様々なイベントで仲を深めています。

山上研Kさん (D2) 穏やかな雰囲気の中で、先生方と学生がチームとなって実験に励んでいます。飲み会では2次会で意気揚々と徹夜カラオケに向かう人たちもいます。

中谷研Iさん (D2) 学生数はやや少なめですが、教員や秘書さんと学生の距離が近くとてもアットホームです。穂高砂防観測所など、フィールドに行く機会が多いのも特徴です。



春は桜と菜の花が綺麗



休憩室でたこ焼きパーティー



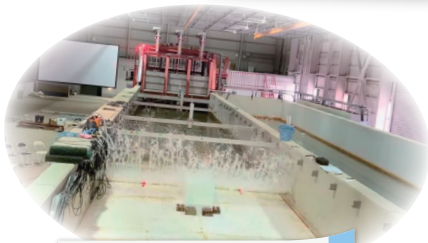
降雨装置

Q2. どんな研究をしていますか？

川池研Mさん (D2) 下水道データが十分に整備されていない都市に対しても適用できる内水氾濫に対する汎用的なシミュレーションの枠組みを構築しています。

山上研Kさん (D2) 河川に吹く風は河川の流れの構造や漂流物の挙動等を大きく変化させます。この風が河川域の水理現象に与える影響について、水路実験による解明を目指しています。

中谷研Nさん (M1) 主に山地河川を対象に河川を流れる土砂量の観測や数値シミュレーションを用いて流砂量の予測を行っています。



津波装置

Q3. 宇治川オープンラボラトリーはどんなところですか？

川池研Tさん (M1) 教員・職員・学生が垣根を越えて交流して親睦を深められる場所です。最寄りの中書島駅から初見で辿り着ける人は一握りです。

山上研Kさん (D2) 和やかな雰囲気、充実した実験施設、そして先生・職員の皆様の手厚いサポートの中で、のびのびと研究を楽しめる環境です。この環境のおかげもあり、土木系研究室対抗野球大会では毎年好成績を残す強豪校となっています。

中谷研Iさん (M1) 広々としているので、自由にのびのびと研究できます。学食がないので、研究室でのお料理に精を出し始める人がときどき発生します。



みんなてキャッチボール

◆◆◆◆ 新スタッフ紹介 ◆◆◆◆

たき けんたろう
瀧 健太郎

水資源環境研究センター
社会・生態環境研究領域 教授

1972年7月7日（川の日）生まれ。滋賀県で18年間、滋賀県立大学で8年9か月の勤務を経て、2026年1月に着任しました。流域の生態系を保全することを通じて持続可能な地域社会を形成していくことに興味を持っています。



出身地 大阪府

趣味 バレーボール、スキー、カヤック、川チャリ

おかざき ともひさ
岡崎 智久

地震防災研究部門強震動研究分野
准教授

学生時代から理論宇宙物理学、固体地球物理学、情報科学と研究分野を変遷してきました。現在は物理学の理論と人工知能・機械学習の手法を組み合わせ、地震学の研究に取り組んでいます。



出身地 滋賀県

趣味 万葉集

みずたに あゆむ
水谷 歩

地震防災研究センター海域地震研究領域
助教

津波の発生メカニズムの研究をしてきました。勤務先である宮崎観測所のある宮崎県も良いところですので機会があればお立ち寄りください。



出身地 高知県

趣味 読書

あしす あちやりや
Ashis ACHARYA

地盤災害研究部門山地災害研究分野
助教

My research utilizes distributed fibre optic sensing to capture subsurface water dynamics and improve landslide understanding and prediction. I am also working on soil infiltration and moisture characterization to better understand rainfall-induced landslides. My long-term goal is to develop high-resolution monitoring systems that contribute to disaster risk reduction by enhancing our understanding of subsurface hydrological processes.



出身地 ネパール

趣味 旅行、料理

たきした こうせい
瀧下 恒星

火山防災研究センター
火山噴火予知研究領域
助教

つくばでの3年間のポスドクを経て桜島火山観測所に帰ってきました。桜島の噴火により放出される火山灰の輸送過程を、シミュレーションと観測の両方のアプローチで研究しています。貴重な現象を逃さないよう食らいついていきます。



出身地 神奈川県川崎市

趣味 お絵描き、フィギュア観戦、ランニング、ギター

り ちょうたく / Li Chanze
李 長沢

地盤災害研究部門傾斜地保全研究分野
助教

斜面災害に関する数値解析手法の開発と応用に取り組んでいます。特に、斜面の変形・破壊から崩壊後の土砂移動に至る一連の過程を解析し、災害の発生機構の解明と予測手法の高度化を目指して研究を進めています。



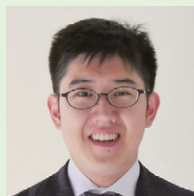
出身地 中国山東省

趣味 映画、アニメ、旅行

なかやま しゅんすけ
中山 舜介

技術室実験技術グループ
専門職（技術）

学生時代は、リモートセンシングデータの解析に取り組みました。その後、民間企業にてシステム開発業務に携わりました。技術職員として、遠心力载荷実験室を担当します。仕事も含めて関西に住むのも初めてで、とても楽しみです。よろしくお願いたします。



出身地 東京都

趣味 観劇、ボードゲーム

なかにし みな
中西 美奈

気候変動適応研究センター
水文気象研究領域
支援職員

4月から初めて京都大学に勤務しています。新しい環境に緊張しつつも、新鮮な気持ちでワクワクしています。十数年近隣に住んでいながら構内の広さに驚いており、これからキャンパス内を散策するのが楽しみです。



出身地 京都府

趣味 野球観戦、旅行、読書

EVENT REPORT

令和7年度研究発表講演会で所長表彰(技術支援)を行いました

2026年2月20日、令和7年度京都大学防災研究所研究発表講演会のプレナリーセッションで、はじめての試みとして所長表彰(技術支援)を行い、堀智晴所長(当時)が2名の専門職(技術)を表彰しました。つづいて、この2名による技術支援報告を行いました。この表彰は、当研究所の専門職(技術)の研究支援における貢献を表彰するものです。

所長表彰(技術支援)2名

- ・長岡愛理 専門職(技術)「海外での地震観測」
- ・中本幹大 専門職(技術)「宇治川オープンラボラトリーにおける技術支援の取り組み」



令和7年度研究発表講演会での発表者を対象に優秀発表賞を授与しました

令和7年度京都大学防災研究所研究発表講演会(2026年2月19-20日)でのパラレルセッションでの発表について、20日、懇親会の場で、堀智晴所長(当時)から15名に優秀発表賞を授与しました。

この賞は、防災研究所で研究を行っている大学院生、研究員、研修員等で、2025年4月1日時点で、30歳未満の方を対象に、研究発表講演会でとくにすぐれた口頭発表・ポスター発表を行った方に贈られます。

令和7年度京都大学防災研究所研究発表講演会優秀発表賞 受賞者(15名)

【口頭発表(9名)】

- ・A210 小山凱「統計モデルを用いた大地震前の前震活動加速現象に関する全世界的調査」
- ・B101 藤井天真「日本の伝統的な河川管理の考え方に基づく水制工の役割再考」
- ・B207 鈴木悠一郎「グリッド依存型可能最大高潮モデルを用いた高潮リスクの長期評価」
- ・B210 松尾佳星「波飛沫を考慮した全球アンサンブル気候実験による台風特性評価」
- ・C107 古家諒也「機械学習を用いた貯水池への流入濁度の予測とアンサンブル降雨予測活用の検討」
- ・C212 小川泰生「北太平洋ストームトラックの季節内変動に対する上流の寄与と予測可能性」
- ・D102 Changze LI「Numerical Study of Landslides Using an Improved DDA-SPH Method」
- ・D211 Jiajin ZHAO「Shear Behavior of Pumice Fall Deposit and the Seismic Triggering Mechanism of the Takanodai Landslide」
- ・E211 鈴木聡平「被災事業所の臨時費用支出が事業再開に与える効果に関する考察 —令和6年能登半島地震の調査結果から—」

【ポスター発表(6名)】

- ・P04 山井美季「黒部川扇状地区間における土砂管理と河床地形の変遷」
- ・P09 中村菜々子「サブグリッド河道および水分保持曲線を導入した新しいRRIモデルの土壌パラメータに対する感度分析」
- ・P23 田坂彰英「日本における気候変動による渇水継続期間の長期化解析」
- ・P34 黒澤大和「単眼カメラ映像と被写体3Dモデルを用いた竜巻中の飛散物の位置および姿勢推定手法」
- ・P57 高平良成「既設光ケーブルを活用したDASによる高架橋全線のモード解析」
- ・P62 武田七海「Slow Slip Event Detection and Associated Seismic Activation in the Hikurangi Subduction Zone, New Zealand」



第11・12回DPRI Award授賞式を開催しました

2026年3月18日、京都大学宇治キャンパスきはだホールで、第11・12回DPRI Award授賞式を開催しました。

イラセマ・アルカンタラ=アヤラ博士(メキシコ国立自治大学地理学研究所教授)に、第11回防災研究所国際表彰DPRI Award(2024年度)研究教育業績賞を、チャールズ・スコーソン博士(カリフォルニア大学パークレー校太平洋地震工学研究センター教授)に第12回防災研究所国際表彰DPRI Award(2025年度)研究協力貢献賞を、堀智晴所長(当時)からそれぞれ授与し、両名へDPRI Fellowの終身称号を付与しました。

また、それぞれの授賞式に続いて、アルカンタラ=アヤラ博士、およびスコーソン博士により、受賞記念講演が行われました。



DPRI 揭示板

受賞表彰
就任

所属等は受賞当時のもの

深畑 幸俊 教授

Top cited article 2025,
Geophysical Research Letters
[2026年4月3日]

■受賞論文

A Multiplex Rupture Sequence Under Complex Fault Network Due To Preceding Earthquake Swarms During the 2024 Mw 7.5 Noto Peninsula, Japan, Earthquake

山田 真澄 准教授ほか

EPS 2025 Highlighted
Papers
[2026年4月]

■受賞論文

Performance of the earthquake early warning system for the 2024 Noto Peninsula earthquake

西村 卓也 教授ほか

EPS 2025 Highlighted
Papers
[2026年4月]

■受賞論文

Investigation on short-term slow slip events in the northeast Japan subduction zones using decadal GNSS data

西村 卓也 教授ほか

EPS 2025 Highlighted Papers
[2026年4月]

■受賞論文

Coseismic slip distribution of the 2024 Noto Peninsula earthquake deduced from dense global navigation satellite system network and interferometric synthetic aperture radar data: effect of assumed dip angle

加納 将行 准教授、西村 卓也 教授

EPS 2025 Excellent Reviewers
[2026年3月11日]

■受賞論文

Performance of the earthquake early warning system for the 2024 Noto Peninsula earthquake

長嶋 史明 准教授、川瀬 博 名誉教授、松島 信一 教授ほか

The 2025 EPS Special Award
[2026年3月11日]

■受賞論文

Predicted results of weak and strong ground motions at the target site of the blind prediction exercise as Steps 2 and 3: Report on the experiments for the 6th International Symposium on Effects of Surface Geology on Seismic Motion (Earth, Planets and Space 2023 75:130, Published on: 29 August 2023)

矢守 克也 教授

感謝状(日本放送協会大阪放送局)
[2026年3月5日]

■受賞理由

自然災害が激化する中、災害報道を担う人材育成に寄与し、またNHKの防災・減災等の様々な番組への取材協力など、多大な尽力

中野 元太 准教授、カルロス・ロドリゴ・ガリバイ・ルビオ 特定研究員

令和7年度地区防災計画学会奨励賞
[2026年3月]

■受賞題目

地域防災活動を駆動するコンテクスト-エルサルバドルとメキシコの事例-

李 惠智

(社会防災研究部門都市防災計画研究分野/
工学研究科建築学専攻D3)地域安全学会
2025年度年間優秀論文賞
[2026年5月15日]

■受賞論文

土地利用一体型水防災事業の実施状況と進め方「土地利用」と「関係者」の視点から-(地域安全学会論文集No. 46, pp. 119-128, 2025.3.)

乗杉 玲壽

(地震災害研究センター/
理学研究科地球惑星科学専攻M2)2025年度京都大学理学研究科
地球惑星科学専攻修士論文賞
[2026年2月]

■受賞論文

不均質断層の複雑な挙動の再現と予測: マルチスケール断層構成則による現実的な地震のスケール則の再現と、AIを用いたモデル地震の予測

貝柄 敬哉

(地震災害研究センター/
工学部建築学科B4)2025年度日本地震工学会大会
優秀発表賞
[2026年1月]

■受賞題目

宮崎平野における微動観測記録に基づく地下構造の推定

上野 嵩朔

(気候変動適応研究センター暴風雨・極端気象研究領域/
理学研究科D1)2025年度
日本気象学会関西支部発表賞
[2026年1月22日]

■発表題目

領域気象モデルを用いた2018年西日本豪雨における対流圏上層トラフの影響の評価

上野 嵩朔

(気候変動適応研究センター暴風雨・極端気象研究領域/
理学研究科D1 (受賞時))日本気象学会
2025年度秋季大会松野賞
[2025年12月11日]

■受賞題目

大阪湾岸地域の高精度気象計算技術の確立と現象分析 Part. 2

長谷川 夏来

(防災技術政策研究分野D2/
清水建設株式会社技術研究所)令和7年度土木学会全国大会
第80回年次学術講演会優秀講演者
[2025年9月10日]

■受賞題目

人吉球磨地域の水害時医療連携に向けた取り組み～医療・行政・建設の共同検討会～

>>> 人事異動

*教授・准教授・講師・助教・職員(それぞれ常勤・特定・特任)について掲載(支援職員を含む)。名称付与は新規のみ掲載。

[2025年12月31日]

技術室 達山 康人 技術職員/辞職

[2026年1月1日]

水資源環境研究センター社会・生態環境研究領域 瀧 健太郎 教授/採用

[2026年1月5日]

社会防災研究部門国際防災共同研究分野(外国人客員)

HARMAN, Ciaran Joseph 客員准教授/採用

[2026年1月31日]

気候変動適応研究センター気象水文リスク情報研究領域(寄附)

呉 映昕 特定准教授/辞職

[2026年2月1日]

社会防災研究部門国際防災共同研究分野(外国人客員)

WESTLUND, Hans Gustav 客員教授/採用

[2026年2月28日]

水資源環境研究センター地域水環境システム研究領域 峠 嘉哉 特定准教授/辞職

[2026年3月31日]

水資源環境研究センターダム再生・流砂環境再生技術研究領域(産学共同)

角 哲也 特定教授/任期満了

地盤災害研究部門傾斜地保全研究分野 寺嶋 智巳 准教授/定年退職

技術室 三浦 勉 技術室長補佐/辞職

[2026年4月1日]

地震防災研究部門強震動研究分野 岡崎 智久 准教授/採用

地震災害研究センター海域地震研究領域 水谷 歩 助教/採用

地盤災害研究部門山地災害環境研究分野 ACHARYA, Ashis 助教/採用

火山防災研究センター火山噴火予知研究領域 瀧下 恒星 助教/採用

地盤災害研究部門傾斜地保全研究分野 LI, Changze 助教/採用

社会防災研究部門防災技術政策研究分野 山本 浩大 特定助教/

所属換←気候変動適応研究センター気象水文リスク情報研究領域(寄附)より

水資源環境研究センターダム再生・流砂環境再生技術研究領域(産学共同)

角 哲也 特任教授/名称付与

技術室 園田 忠臣 技術室長/昇任

技術室 中山 舜介 技術職員/採用

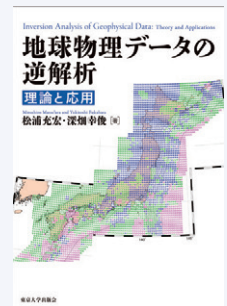
気候変動適応研究センター水文気象研究領域 中西 美奈 支援職員/採用

松浦充宏・深畑幸俊 著

地球物理データの逆解析： 理論と応用

A5判 366ページ
2026年6月・東京大学出版会刊

「逆解析」は「インバージョン解析」とも呼ばれますが、観測データ（例えば、地殻変動データ）からモデル（例えば、地震のすべり分布）を統計学に基づいて推定する数学的手法で、地球物理学を始めとする広範な分野で本質的に重要な役割を果たします。逆解析の数式は、弾性体力学や流体力学などと比べ、見た目はそれほど複雑



でない一方、その意味するところが深いという特徴があります。本書では、逆解析に必要な知識をまとめた理論編に加えて、豊富な解析の実例を解説する応用編により、逆解析の面白さや奥深さを学ぶことができます。特に、逆解析ではしばしば直観に反するおかしな解析結果が得られてしまうのですが、いくつかの事例でその原因と解決策が示されていて、世界に類例を見ない教科書となっています。そうしたことから、タイトルには「地球物理学」と付いていますが、分野を問わず逆解析に携わる大学院生や研究者にとって有用な書物です。

(深畑幸俊)

京都大学総合研究推進本部 監修/高松夕佳 著

京大理系の科学入門： 「すごい研究」はこうして生まれる

新書版296ページ
2026年4月・講談社刊

私は本書を書いたのではなく、取材を受けてある章に登場している、という立場です。その取材のときに指摘を受けて気づいたことですが、どうやら私は「変わった経歴を辿っている研究者」のようです。思い返してみれば、日本、スイス、デンマーク、そして日本と転々とする間、自分が身を置く分野も建築、環境学、土木、そして防災と変わって



きました。自分では意識していなくて、その時々自分の興味の赴くままに行動した結果がこうだったという感じです。そして、このような経歴を通じて学んだ信頼性工学、リスク評価、意思決定論、風工学の知識が、結果的に現在の研究テーマである国内外の強風災害の低減に役に立っています。偶然のような気もしますし、必然のような気もします。さて本書では、私を含め複数の京大理系の教員にインタビューした内容が記されています。京大理系の教員がどんな(変わった)人なのか、是非手に取ってご覧いただければと思います。

(西嶋一欽)

編集後記

本号では、特集として「防災学の未来」と題した座談会を企画し、新所長と各分野を牽引する4名の研究者に大いに語っていただきました。司会者として、限られた時間の中で議論を十分に深められるか、また話題が広がりにすぎないかと少し心配していましたが、結果として非常に濃密な2時間強の座談会となりました。激甚化する自然災害や複雑化する社会情勢—大学を取り巻く環境も含めて—を背景に、興味深い議論が展開されています

ので、ぜひ一読ください。座談会のほかにも、多彩な連載記事を掲載していますので、あわせてお読みいただければ幸いです。

私自身にとっても、これまでどこか他人事として捉えていた大きなうねりを、自分事として考え直すよい機会となりました。その意味で、防災学の未来もまた、どこかにあらかじめ「ある」ものではなく、日々の研究・教育・実践を通じて、私たち自身がつくり続けていくものなのだと感じました。

(上田恭平)

「DPRI Newsletter」のほかに、こちらからも防災研の情報がご覧になれます。



ホームページ
<https://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/>



YouTubeチャンネル
<https://www.youtube.com/@dpri-ku>



Facebookページ
<https://www.facebook.com/DPRI.Kyoto.Univ>



X
<https://twitter.com/dpripriwit>



メールマガジン (登録ページ)
https://dpriicon.dpri.kyoto-u.ac.jp/mailmagazine/mailmagazine_user.php

京都大学防災研究所 Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

編集/京都大学防災研究所 広報・出版専門委員会、広報出版企画室 発行/京都大学防災研究所

〒611-0011 宇治市五ヶ庄 Tel: 0774-38-3348 (代表) 0774-38-4640 (広報)

ご意見・ご要望はこちらへ toiawase@dpri.kyoto-u.ac.jp

2026年5月発行